2025 年1月26日 河内地区有志教会女性会例会 礼拝メッセージ
「全ては御手の中に」 久宝教会・牛田匡牧師
聖書 コリントの信徒への手紙Ⅰ 9章 19−23 節

今日はこうして河内地区の大勢の方々にお集まり頂いて、ご一緒に地区女性会の例会を持てますことを感謝いたします。以前、この会が久宝教会で開催されたのは、6 年前でしょうか。当時は柏原市にある特別養護老人ホーム「大阪好意の庭」のリハビリホールにて礼拝を行っておりましたので、そちらにお集まり頂いたことを覚えています。その後、コロナ禍となり、オンラインでの集会もあったかもしれません。今から 5 年前の 2020 年のコロナ禍真っ只中に、久宝教会発祥の地である久宝寺地域に 10 数年ぶりに戻って来て、こうして今日、この場に皆様にお越し頂けたことは、嬉しいことです。

さて、河内地区の皆様にはいつも久宝教会のことだけではなく、日本コイノニア福祉会の働きの事も覚えてお祈り頂き、また尊い献金や献品などを頂き、ありがとうございます。私は普段、こども園や保育園の子どもたちと礼拝の時間をもって、聖書のお話をしたりしていますが、その他にも柏原市に2つあります特別養護老人ホームにも、出向いて行って、行事の際の礼拝などをしています。11 月には毎年ホームから天に召されて行った方々の召天者記念礼拝がありますし、クリスマスには入居者の方々と一緒にクリスマス礼拝を行ってお祝いしています。

ですが、保育園の子どもたちにしても、介護施設の入居者、利用者の方々にしても、クリスチャンの方々はほとんどおられませんし、「キリスト教の施設だから利用・入居をした」と言われる方々もほとんどおられません。職員の中にもクリスチャンは数えるほどしかいないという状況です。また特養に入居されている方々の大半は、耳が遠くなり、認知症も発症されておりますので、私がこんな丸坊主頭で施設に行って、お話やお祈りをしていると、私のことをお坊さんと勘違いされて、両手を合わせて「南無阿弥陀仏」と言われたこともありました。勿論、私も笑顔で合唱して頭を下げました。その姿は「キリスト教を知らないから、間違っている」というのではなくて、敬意を表わす尊い態度の現れなのだろうと有難く受け止めました。

また別の話になりますが、クリスチャンの方々と「聖書を読む会」をしている中で、「お姑さんは、学生の頃から敬虔なクリスチャンで、私よりもずっと熱心に教会に通い、活動もしていたけれど、年をとって認知症がひどくなり、最後は何も思い出せなくなって、手を合わせて『南無阿弥陀仏』と言ってた。私が『お義母さん、「南無阿弥陀仏」ちゃうで、「アーメン」やで』って言っても、分からないんですよね。人生の大半をクリスチャンとして歩んできたけど、最後に残ったのは幼い頃の実家の仏壇の前での記憶だったんですね」というエピソードを聞かせてもらったこともあります。「三つ子の魂、百まで」ということわざではありませんが、幼少期に「身

に着いたもの」というのは、その人の中に奥深く残っているのだなと思わされたお話しでした。

高齢になり、教会に通えなくなり、病院に入院したり、入居施設に引っ越されたりする方が、久宝教会でも沢山おられます。それでもご家族を介して連絡がとれていれば良いのですが、中には連絡がとれなくなってしまった方々もおられますし、場合によっては私たちが知らされていない間に天に召され、葬儀も終えられてしまっている、ということも無いとは言えません。そのような時、私たちはこの地上で、共に教会生活を送って来た仲間、「神の家族」として、大変寂しく思います。ですが、たとえその方が仏式で葬儀を行われ、戒名が授けられ、教会の墓地に納骨されなかったとしても、だからと言って、「その魂が天の故郷に帰っていない」と考える人は、きっとおられないのではないかと思います。同じように、人生の大半を過ごした教会生活を忘れ、聖書も賛美歌もお祈りの言葉も全て忘れてしまって、最期の言葉がたとえ「南無阿弥陀仏」であったとしても、その方の魂を天の国が迎え入れないはずはありません。なぜなら人間がいくら忘れても、神様は決してお忘れにならないからです。

近年、私は社会福祉の仕事を助け、支えて下さっている関係で、お坊さんとお話をする機会が増えています。先日聞いた面白い話で、人が「南無阿弥陀仏（阿弥陀仏に帰依します。阿弥陀仏を信じます）」と唱える時、それは「その人が自分の意志で唱えているのではなくて、阿弥陀仏がその人の中に入って、仏様ご自身がその人の口を使って唱えさせている」のだそうです。そしてどんな人であっても、「南無阿弥陀仏」とたった１回でも口から出たら、その人は極楽浄土に生まれることが出来るのだそうです。そうしますと、先程紹介いたしました認知症で最期に「南無阿弥陀仏」と唱えて天に召されたクリスチャンの方は、紛れもないクリスチャンだけれども仏様がその方の中から、その方の口を使って「南無阿弥陀仏」と言わせて、極楽浄土へ行かれたのでしょうか。皆様は、どう思われるでしょうか。

もう一つ、聞いた面白い話として、「念仏も方便」ということを伺いました。念仏そのものに意味がある、救いがあるというのではなく、すべては仏が迷える衆生を救うために与えた方便、手段だというのです。「嘘も方便」ということわざがありますが、正しい目的を達成するためには、取り得る限りの様々な手立てを取ることが許される。ものすごく大雑把に言えば、「何をしたらよいか分からず戸惑っている人たちに、とにかく念仏すれば大丈夫、と伝えて安心させ、信仰を促す」ということでしょうか。日本の歴史を振り返ってみましても、貧困や病気、天変地異や過酷な労働など、一見救いなんてどこにもなさそうな状況の中で、それでも「ここに確かな救いがある」と一本の灯火を掲げること。それによって歩むべき方向、道が分かって、迷わなくなり、救われた人たちは確かに多かったのだろうと思います。

そのようなことを考えてみますと、キリスト教においても、イエス様がなさったこと、示されたことは同じではないでしょうか。旧約聖書に数々記されている律法は山ほどあります。きっとそれぞれに意味があり目的があり、それぞれの時代に定められ、人々に与えられたのでしょう。しかし、いつしかその方便としての役割、目的が見失われてしまって、律法を形式的に守っているか守っていないかだけしか注目されないようになってしまった。そしてその結果、人が人を裁くようになってしまった。そのような中で、イエス様は「人を裁くな」「愛をもって神と人とを愛し、神に立ち返れ」と教えられ、またそのことを身をもって示されました。

先ほど、お読みしました「コリントの信徒への手紙Ⅰ」9 章の言葉は、多くの人々に伝道したパウロが、福音宣教のための自身の姿勢を語っている言葉です。どんなに困難でしんどいことでも、たとえ汚れ仕事でも、嫌われ仕事でも、「（私は）福音のために、すべての人に対して、すべてのものとなりました。ともかく、何人かでも救うためです」という力強いパウロの言葉は、その言葉を読む私たちを鼓舞し、奮い立たせます。しかし、その一方で、私たちは時に、伝道に躓きを覚えるのも事実ではないでしょうか。「教会に行って何かいいことあるの？」と言われることもあれば、「感染症が広がっているのに、礼拝に行くなんて」と言われることもあります。とくに家族の中で自分だけが礼拝に行っている場合、家族への伝道というのは、大きなハードルかと思います。

私事になりますが、9 年前に癌で亡くなった私の母は、ミッションスクールの大学を卒業したこともあってか、私がキリスト教学校に進学し、また就職することにも理解を示してくれていました。ですが、私が「教員の仕事を辞めて牧師になるために神学校に行きたい」と言った時は、幼かった孫たちの生活を心配して反対しました。それでも実際に、この道に踏み出した後は応援してくれました。それにも拘らず、最期まで母自身がクリスチャンになることはありませんでした。「余命半年」と宣告されて、日に日にやつれて行く中で、病床洗礼の話もしましたが、これまでキリスト教に距離を置いて来た中で、「最後の最後に美味しい所だけをつまみ食いするのは、そんな勝手は許されない」と言って受け入れてくれませんでした。そして田舎にある実家が檀家をしているお寺とはあまり関係が良くありませんでしたので、今の住まいの近くのお寺で葬儀と納骨を行いました。

キリスト教でも、教会によっては、「イエス・キリストを信じ、洗礼を受けなければ地獄に行きます」と宣言している教会もたくさんあります。毎月、私たちは礼拝後に200 個近いおにぎりを作って、西成区の釜ヶ崎で生活困窮者やホームレスの方々にお渡ししていますが、そんな私たちの横や目の前でトラクトを配りながら、「この世界はもうすぐ滅んで、みんな地獄に行きます。でも洗礼を受けたら天国に行けます。あなたも洗礼を受けましょう」と声をかけている教会の人たちがいます。また 2

時間近い集会の後、洗礼を授けてから炊き出しを渡している教会もあります。ですから、おにぎりを配っている私たちに「おたくらもキリスト（教の教会）か。わしは炊き出しもらうのに２回か３回、洗礼を受けたで」と教えてくれた方もおられました。

イエス・キリストを信じ、洗礼を受けなければ、救われないのでしょうか。それこそ「南無阿弥陀仏」と念仏を唱えたら、天国ではなく極楽浄土に行くのでしょうか。夜空に月が昇っていることに気付いていない人に対して、指さして月を教える人がいなければ気付くことが出来ないのは確かですが、大事なのは月を指さす指を見ることではなく、指し示されている先の月を見ることであるはずです。時代によって、場所や地域によって、文化によっても、宗教の教え、教義は異なります。それらの教えの数々が、真実を示すための「方便」であり「指」なのだとしたら、大切なのは「指」ではなく、真実そのもののはずです。

パウロは真実である福音を宣教するために、「全ての人のためにすべてになった、出来ることは全て行った」と語りました。しかし、これは「だから私たちも隣人に伝道するために、ありとあらゆることをするべきだ。とにかく精一杯頑張りなさい」というだけではなく、むしろ見方を変えると、パウロにそのような言葉を与えた「神様自身が、あらゆる時に、あらゆる姿で、様々な言葉や出来事を通して、私たち一人一人に関わって下さった。その出来事を通して、私自身が気付かされ、変えられて、今がある」と理解することも許されるのではないかと思います。私たちに出会って下さる方々、それは時に他宗教の方々であったり、信仰を拒否する家族や友人であったり、私たちの行動と思考を制限していく病気や老いであったりします。

全ての人が否応なく、年をとり小さく無力にされて行く現実の中で、隣人に伝道するというのは、自分たちが如何に立派な指であるかということを誇示する事、相手の間違いを論破して力でねじ伏せることではありません。むしろ、あなたも私も全ての命が、命の創り主である神様によって豊かに形作られ、豊かに用いられていくものだということを、身をもって示して行くことではないかと思います。私たちの小さな頭では分からなくても、神様は大いなる計画をもって、全ての命を創られました。旧約聖書続編の中にある「知恵の書」11 章 24 節には、次のような言葉があります。

「（神よ）あなたは存在するものすべてを愛し／あなたがお造りになったもので
あなたが忌み嫌うものは何一つない。／憎んでおられるのなら
造られなかったはずだからである」（旧約続編・知恵の書 11：24）

全ては神の御手の中に……。私たちが神様を忘れたり、離れたりしても、神様は私たちを忘れたり、離れたりはしません。今日もこれまでも神様の御手の中に抱かれて来たことを覚え、感謝すると共に、これからも神様と共に、またこの教会、地区で出会った大勢の仲間たち、友人たちと共に、私たちは歩みを続けて参ります。